

# ヨーロッパ統合の立役者たち (1)

— リヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギー —

田 中 文 憲\*

The leading men of European Unity (1)

— Richard Coudenhove-Kalergi —

Fuminori TANAKA

## 要 旨

第一次世界大戦が終わって間もなく、東京生まれの一人の人物が現代のEUのもととなる「パン・ヨーロッパ」運動を展開した。彼はリヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギーといい、父はオーストリア＝ハンガリー帝国の伯爵で外交官、母は日本人で東京の町娘であった。

本稿では、クーデンホーフ＝カレルギーが起こした「パン・ヨーロッパ」運動の盛り上がりと挫折の理由を探索してみた。

当時一世を風靡したオスヴァルト・シュベングラの「西洋の没落」が告げたヨーロッパの危機に対して、クーデンホーフはヨーロッパを統合することでこの危機を克服することを唱え、強い意志を持って行動した。そこには、クーデンホーフ独特の発想と行動力を支える旧ハプスブルク帝国の伝統や精神、父ハインリッヒの存在、彼の幅広いしかも深い歴史的、哲学的思索があることがわかった。

2000年にフィッシャー独外相がヨーロッパ連邦構想を新たに発表して以来、一段高いレベルの統合へ向けて歩みつつあるヨーロッパにとって、ヨーロッパ合衆国ないしヨーロッパ連邦の実現に命をかけたクーデンホーフの発想と行動は、今こそもっと評価され、参考にされるべきである。

## はじめに

現在、世界はグローバル化の名のもと、アメリカ極集中化が進んでいる。こうした動きに対して、ヨーロッパは統合することで対抗して行こうとしている。その成果の一つがEU（欧州連合）であるが、そのルーツが50年前に設立された欧州石炭鉄鋼共同体（ECSC）であることに異論はないであろう。また、ECSCは欧州統合の父と呼ばれるジャン・モネの構想を基にしたシューマン・プランを実現したものであることもよく知られている。

本稿では、第二次世界大戦以前に、「ヨーロッパ統合すべし」を旗印にかかげ、「パン・ヨーロッパ」運動を果敢に展開し、ジャン・モネをはじめ第二次世界大戦後ヨーロッパ統合を推進した  
平成15年9月26日受理 \*教養部

数多くの人々に多大な影響を与えたりヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギーを取り上げる。(以下クーデンホーフ) クーデンホーフは欧州統合運動の実質的な創始者であり、この意味で欧州統合の「祖父」とも言うべき人物である。クーデンホーフが開始した「パン・ヨーロッパ」運動およびその行動を支えた彼の発想と信念を分析することによって、欧州統合が新しい段階に入ったと言われる現在、彼の発想と行動がEUの将来にどのような指針なり示唆を与えうるかについて検討を試みた。

## I. リヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギーの生い立ち

リヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギー (Richard・N・Coudenhove=Kalergi) は、オーストリア・ハンガリー国代理公使であったハインリッヒと日本人女性青山光子(ミツ)の間に1894年11月17日東京で生まれている。日本名を栄次郎といい、1年前に兄ハンスも東京で生まれている。

クーデンホーフ＝カレルギーは伯爵家 (Graf) である。クーデンホーフ家はフランドル地方出身で古くからハプスブルク家に仕えてきた貴族であり、カレルギー家はギリシャ系でビザンチン王朝の王族である。リヒャルトの祖父 (クーデンホーフ) と祖母 (カレルギー) の結婚によってクーデンホーフ＝カレルギー家となったのである。クーデンホーフ＝カレルギー家はボヘミア (現在のチェコ) とハンガリーに広大な領地を持つ貴族であったが、リヒャルトの父ハインリッヒは外交官となり、アテネを振り出しにリオデジャネイロ、コンスタンチノーブルなどを回り、東京に赴任した<sup>1)</sup>。東京でハインリッヒは日本語を熱心に勉強するとともに絶えず魅力を感じていた仏教の研究にも熱中した。彼は語学の天才で、ドイツ語、英語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ロシア語、チェコ語、トルコ語、アラビア語、ヒンズー語、ギリシャ語、ラテン語、朝鮮語、日本語、中国語、マレー語、アルメニア語の18ヵ国語ができた。通常欧州の外交官は日本の宮中で両陛下と話す時は通訳を使っていたが、ハインリッヒは通訳なしであった<sup>2)</sup>。

一方、母光子は東京の牛込で油の販売のかたわら骨董屋を営む江戸町人青山喜八を父として生まれ、純日本的しつけを受けて育った。光子はその美貌と芸事の素養を見込まれ、明治の代表的社交場として鹿鳴館とならび称された紅葉館に女中 (今日風に言えばホステス) としてスカウトされるほどの美人であった<sup>3)</sup>。

ハインリッヒは神秘的な美しさを備えた18才のうら若き日本女性を見染め、ほどなく二人は結婚した。1896年足かけ5年にわたる任務を終え、クーデンホーフ夫妻は2人の子供と共にボヘミアのロンスペルクの城へと帰った。ハインリッヒは再び外地 (特に東洋) に赴くつもりであったが、領地の経営を委ねていた人物の不正を見つけたことにより、外交官の道をあきらめ、領地の経営に自ら当る決心をした。これ以降、一家はロンスペルクに腰を落ち着け、ハインリッヒは1906年に亡くなる直前まで哲学および宗教の研究に打ち込んだ。本物のコスモポリタンであったハインリッヒは息子リヒャルトの思想形成に大きな影響を与えている。リヒャルトの述懐によれば、彼の思想は、ショーペンハウエルおよびインド哲学に関して父が机のそばでしてくれた談話

に多くを負っているのである。さらに母親が日本人であることの影響を、「ヨーロッパの男性とアジアの女性との間に生まれた子供として、われわれは国家的観念をもって物を考えないで、アジアおよびヨーロッパという大陸的な考えをしていた。われわれの眼から見ると、この両者は異なった外見ではあったが、価値については同等であった。」と述べている<sup>4)</sup>。また、ハインリッヒはユダヤ人問題にも深い洞察力を示し、プラハ大学の学位論文「ユダヤ人排斥主義の本質」によってアリア民族とか、ユダヤ民族などは実在したものではなく、ただこのような名称の言語のグループが存在するにすぎないことを実証し、現在のユダヤ人は、一般に信じられているように、パレスチナの古代住民の子孫ではなく、地中海沿岸の諸民族の中からユダヤ教に改宗した者の子孫であって、ただ宗教を通じてひとつの人為的な民族共同体として結合したものであることを説明している。こうしたハインリッヒの民族に対する開明的な考えは、後年リヒャルトおよび兄のハンスがユダヤ人女性と結婚することに道を開いたと言えよう。さらにハインリッヒは、「オーストリア・ハンガリーに対する政治的考察」と題する小冊子を出版し、オーストリアは領内のスラブ民族蔑視の悪い習慣を改め、彼らに完全な同権を与え、一種の連邦主義組織にすることを提案している。こうした発想が後年リヒャルトによって展開される「パン・ヨーロッパ」運動の源流になっているとも考えられる<sup>5)</sup>。

家庭内の会話は、両親の間では日本語であっても、リヒャルトをはじめ子供たちと話す時は、母光子は英語を使い、父と話す時はドイツ語を使った。これはハインリッヒが子供たちが二つの文化の間に挟まれて成長することを好まず、いっさいの国家的偏見にとらわれなくて、真のヨーロッパ人として教育されることを欲していたからである。

父ハインリッヒが亡くなった後、母光子が一家の大黒柱になったが、母からは父が与えてくれた精神的な刺激は受けられなかった。そこでリヒャルトは、父の残した大きな図書室で、ありとあらゆる種類の本を次々に読破し、学校の授業よりもはるかに多くのものを学んだのである。

その後、南チロルの町ブリクセンのギムナジウムに送られ、最終的にウィーンに帰り、マリア・テレジアの創立したオーストリアで最良のテレジアーヌム校に入学した。テレジアーヌムでの環境は全く国際的で、ハプスブルク民族国家の縮図であった。学友には、ドイツ人、ハンガリー人、ポーランド人、チェコ人、イタリア人、ルーマニア人、クロアチア人、南スラブ人、セルビア人、ウクライナ人のほかに、ロシア人、トルコ人、インド人、ペルシャ人、中国人がいた。テレジアーヌムで、リヒャルトはそれぞれの国民の中には善人もいれば、悪人もおりまた賢い人間も愚かな人間もおり、しかもその割合が大体同じであること、さらに過激な愛国主義は半教養者の偏見にほかならないことを看破した。

1913年にテレジアーヌムを卒業したリヒャルトの将来の希望は哲学の教授になることであった。そして哲学と近代史の勉強のためウィーン大学に入学した。

ウィーン大学に入学後間もなく、リヒャルトにとって大きな転機が訪れる。それは当時の有名女優イダ・ローランとの出会いと結婚である。彼は彼女との結婚によって新しい環境を知ったのである。つまり「私とは根本的に異なった世界観と政治的見解を持っている家と、私が精神的にはずっと以前から疎遠になっていた保守的な環境からの束縛から、私は私の婚約と結婚によって一挙に解放された」のである<sup>6)</sup>。しかし、この結婚は大きな波紋を呼んだ。一つはリヒャルトが

まだ19才で未成年であったこと。もう一つはイダが母光子とあまり変らない年齢であり、エリカという連れ子まであったことである。さらに女優という職業を封建的な日本の考え方から河原乞食と考えていた光子は猛烈に怒り、ついにリヒャルトを勘当したのである。さらにリヒャルトが自分が分配を受けるべき予定の財産分与を要求し、しかもその金でイダが手に入れたと思っていたブルク劇場を買おうとしていることが露見したため、光子はカンカンに怒り、これで仲たがいは決定的になってしまった。後年、「パン・ヨーロッパ」運動で名前が知られるようになるにつれ、光子はリヒャルトを許すが、イダだけは「あの牝狐」と呼んで許そうとはしなかった<sup>7)</sup>。

こうした波瀾はあったものの、哲学および歴史学徒としてのリヒャルトは順調で、すでにテレジアヌム在学中に『道徳の根本としての客観性』を著したのをはじめ、1917年ウィーン大学へ提出した卒業論文『客観性即道徳の基本原則』が後に博士論文として認められている。

自分の理念に合致した政党がなかったため、クーデンホーフは政治家になることをやめ、自由な著述家になった。彼の著述家としての最初の論文は、プラトンの観念を体して、精神的な貴族階級の指導する社会主義国家経済を要望する『プラトンの国家と現代』(Platons Staat und die Gegenwart)で『ディー・エルテ』誌に発表された。

政治よりも哲学の方に常に惹かれる彼は第一次世界大戦中に『超倫理』を著わし、学位論文の要約と併せて、1921年『倫理と超倫理』(Ethik und Hyperethik)のタイトルで出版している。

## II. パン・ヨーロッパ運動の展開

### 1. 第一次世界大戦の衝撃

第一次世界大戦は、ヨーロッパに未曾有の人的および経済的打撃を与えた。1914年7月から1918年11月までの52カ月間に6500万人が動員され、そのうち1300万人が死ぬか致命傷に近い重傷を負い、2200万人が負傷している。さらに多数の非戦闘員や女子供が犠牲になった。また経済的損失も2700億ドルと莫大なものになった<sup>8)</sup>。

クーデンホーフはこの大戦争の原因をヨーロッパにおける国家主義と超国家的なハプスブルク君主政体の衝突と見ている。そして、この国家主義はフランス革命によってうち立てられた王の代りに主権を持った国民という観念が基になっていること、さらに強すぎる国家主義は平和を乱すことを見抜いている<sup>9)</sup>。やがて彼は、国家主義を克服するにはヨーロッパを統合し、共同体にするしかないとの考えに至るが、これにはもう一つの出来事が大きく影響している。それは彼の祖国オーストリア＝ハンガリー帝国が解体されたことである。たしかにオーストリア＝ハンガリー帝国は時代錯誤的であったし、時代に合わせた改革を行う力を失っていたが、アメリカ大統領ウィルソンの言う「民族自決」が「民族独立」と解釈されて各民族が独立国家を作ることを許し、オーストリアは骨だけにされた魚のようになってしまった。しかもオーストリアを含むどの独立国も世界になんの指導的地位も占めない弱小国になってしまったことから、彼は、ヨーロッパは世界の中心から、その辺境に押しやられたと強く感じたのである<sup>10)</sup>。こうした状況を、フランスの文豪アナトール・フランスは「オーストリアの分割はおよそ馬鹿げている。中部ヨーロッパをバルカン化することは、わざわざ新たな戦争の種を播くことである。ウィルソンはヨーロッパに

つについてはまったく無知で、国家の権利を化学者のように秤で計算している<sup>11)</sup>。」と述べたとされている。

## 2. オスヴァルト・シュペングラーと『西洋の没落』

クーデンホーフは、第一次世界大戦後のヨーロッパの状況に大きな不安を抱いたが、思想面で彼に影響を与えたのが、オスヴァルト・シュペングラー (Oswald Spengler) である。シュペングラーが、彼の主著『西洋の没落』を構想10年、執筆3年の後1918年に第1巻として出版するや、ヨーロッパ中に大きな反響を呼び起こした。シュペングラーは文化とは生物体だと言う。つまり世界史はその全体の伝記であり、巨大な中国文化史、あるいはギリシャ・ローマ文化史は、1つの人間、動物、樹木、あるいは花の小歴史と正確な対象をなすと言うのだ。さらに彼は、われわれの時代より先にギリシャ・ローマの没落が起きたが、これとまったく同じことが起きようとしている。それはわれわれ自身の没落であり、「西洋の没落」(der Untergang des Abendlandes) であって、その初期の徴候は、すでにわれわれの中やその周囲に認められると主張する。さらに、どの文化も、子供、青年、壮年、老年の時代を持っていると言う。また言葉を換えて、一世代という長さは、どんな生物にとってもほとんど神秘的な意義のある事実であり、このことはあらゆる高度文化にも妥当すると言う。さらに、あらゆる成ったものは移り行くが、移り行くものは、民族、言語、人種、文化だけではない、ユスチニアヌス時代に、もはやローマ人が存在しなかったように、数世紀のうちには、西ヨーロッパ文化は無くなり、ドイツ人、イギリス人、フランス人は無くなるであろうとまで言っている<sup>12)</sup>。

ヨーロッパ文明の類廃は、もはや回復しがたい段階に来ており、しかもヨーロッパの没落は避けがたい運命であるとのシュペングラーの主張は、クーデンホーフをはじめ特に敗戦国のインテリ層に深刻な影響を与えたのである。この状況をスチュアート・ヒューズは、『西欧の没落』が人々の心をとらえたのは、彼らがすでに感じていた絶望の理論的表現を『西欧の没落』に見出したからで、さらに、敗北から得た屈辱感を癒そうとしていた敗戦国の人々にとって、彼らの敵であった人々でさえ、自分たちより安楽な生活を送れるわけではないと教えてくれるのは慰めであったからだと述べている。なぜなら、シュペングラーは、西洋の国は例外なく没落の運命から逃れられないと主張していたからである<sup>13)</sup>。シュペングラーの名声は、1919年2月ミュンヘンの市庁舎で当代随一の社会学者マックス・ヴェーバーと討論集会を行っていることからわかる<sup>14)</sup>。

このヨーロッパの没落というシュペングラーの与えた影響は、クーデンホーフの発表した論文や著作の随所に現れている。たとえば、「パン・ヨーロッパ」<sup>15)</sup> (1923年)、「ヨーロッパは統合しなければならない」<sup>16)</sup> (1939年)、「物質主義からの離脱」<sup>17)</sup> (1930年)、「悲惨なきヨーロッパ」<sup>18)</sup> (1935年)、「戦争から平和へ」<sup>19)</sup> (1959年) などである。

クーデンホーフはシュペングラーから多大の影響を受けたものの、彼の得た最終結論は、ヨーロッパ没落の原因は生物的なものではなく政治的である。したがって、政治制度を根本的に変えれば、病めるヨーロッパは完治するに違いない<sup>20)</sup> というものであった。クーデンホーフは前向きで楽観的な性格の持ち主であった。

彼のこの性格がパン・ヨーロッパ運動の推進力の源になっていたことは容易に理解できるとこ

ろである。

### 3. パン・ヨーロッパ運動

クーデンホーフが病めるヨーロッパの政治制度を変える手本となると考えたのが、アメリカ合衆国であった。なぜなら、もともとヨーロッパの人々が移住し、作り上げた国であるのにアメリカは今や日の出の勢いであり、一方ヨーロッパは没落の危機に瀕している。この差は断じて人種などという生物的なものではなく、その政治にある。アメリカはヨーロッパの感覚であれば国に当たる州が48もあり、しかも言語も通貨も同じで、もちろん州ごとに各々の軍隊があるわけではなく、州と州の間に関税障壁もない。一方、ヨーロッパを見るとアメリカの3分の2の広さの所に26の国が目白押しとなりお互いにかみ合っている。この弊害を無くすには、ヨーロッパをアメリカのような一つの連邦にするべきであるとの考えに至った。この時たまたま読んだA.H.フリード (A.H.Fried) の「パン・アメリカ」(Pan-America) に感銘を受け、「パン・ヨーロッパ」に対する思いが一層強くなったのである。

次に彼が考えたことは、実際どの国がパン・ヨーロッパのイニシャティブをとるべきかということであった。イギリスは自ら大帝国有して乗り気薄であろうし、フランスは名うての国家主義者ポアンカレーに率いられており無理であろう。ドイツは敗戦国で問題外であるし、イタリアは国内が四分五裂して強力な外交政策をとる力がないと見られていた。そこで彼が白羽の矢を立てたのが、オーストリア＝ハンガリー帝国崩壊後にできていた小国協同 (Little Entente)、すなわちチェコスロバキア、ルーマニア、ユーゴスラビアの連合体である。当時の中部ヨーロッパを代表する政治家はチェコスロバキアのマサリク大統領であった。マサリクは1920年に「新しい欧州」を著し中欧における民主国家の協力機関構想を発表している人物であり<sup>21)</sup>、クーデンホーフも帝国崩壊後たまたまチェコスロバキア国籍になっていたこともあり、マサリクこそパン・ヨーロッパの実現のために手を貸してもらうべき人物と考えたのである。その後、クーデンホーフはマサリクに会う機会を得て、パン・ヨーロッパの必要性和可能性について述べた後、ヨーロッパ合衆国のジョージ・ワシントンになって欲しい旨要望した。しかしマサリクの回答は、「時機尚早」であった。後年マサリクは、「もし自分が35歳であったら、ヨーロッパ合衆国の実現に全力を尽すのだが」と述べているが、いずれにせよ、クーデンホーフの「パン・ヨーロッパ」運動の最初の試みは失敗に終わったのである。

その後、クーデンホーフはさまざまな団体や機関を当たったが無駄であった。そこで、彼はマスコミを利用して、すべての人に直接語りかけようと決心したのである。1922年パン・ヨーロッパに関する最初の論文「ヨーロッパ問題」はベルリンの「フォッシッシェン・ツァイトウング」紙とウィーンの「ノイエ・フライエ・プレッセ」紙に掲載された。これらの新聞を通じて「パン・ヨーロッパ連合」への加入を呼びかけたが、結果は、はかばかしいものではなかった。

こうした状況の中で書かれたのが、『パン・ヨーロッパ』である。1923年の初め、上オーストリアにある友人の城にこもって、数週間で一気に書き上げている。『パン・ヨーロッパ』の出版のためにウィーンにパン・ヨーロッパ出版社 (Paneuropa Verlag) を設立したが、資金はおそらくイダ・ローランの舞台収入でほとんど賄われたと考えられる<sup>22)</sup>。こうして1923年10月『パン・

ヨーロッパ」は世に出たが、本の表紙には、パン・ヨーロッパ連合の象徴として、金色の太陽の上に赤十字を入れた太陽赤十字をつけた。赤十字はヨーロッパにおける超国家的な共同体の最も古い象徴である十字軍にちなんだものである。十字軍は彼の先祖ゲロルフ・クーデンホーフが、第一回十字軍に従軍していることから、クーデンホーフにとっては特別な意味を持っていたのであろう。また、太陽はギリシャ精神の象徴であるアポロであり、この上に置かれた十字はギリシャ精神とキリスト教というヨーロッパ文化の永遠の基礎を表わすものとなっている<sup>23)</sup>。

#### 4. 『パン・ヨーロッパ』の内容

『パン・ヨーロッパ』の中で、クーデンホーフが訴えていることは次のように要約できる。彼はまず、第一次世界大戦後の世界は五つの大きな勢力に支配されていると言う。それらは、七つの海を支配する大英帝国、ボルシェビキ革命後勢力を極東にまで伸ばしたロシア、急速に力をつけた日本と巨大な中国を中心とするアジア、政治的・経済的統一により世界最高、最強となったアメリカ、大戦によって疲弊し、没落の危機に瀕するヨーロッパである。しかし、彼は悲観することはないと言う。ヨーロッパの危機は運命などではなく、政治的なものだからだ。このヨーロッパの危機を救うものは、アメリカのように政治的・経済的に統一すること、すなわちヨーロッパ合衆国になることだと主張する。さらに近い将来、軍事的にはロシアが、経済的にはアメリカが大きな脅威になるであろう<sup>24)</sup> から、ヨーロッパは団結を急ぐ必要がある。(この部分はドイツ語版にはあるが、アメリカで出版された英語版では反発を懸念してか除かれている。) クーデンホーフはヨーロッパの置かれた状況を古代ギリシャに見た。当時、スパルタ、アテネ、テーベの3大国がお互いに覇権を争っている間に、北方にマケドニアが勃興し、ギリシャの独立を脅かし始めたのである。この時デモステネスは、パン・ギリシャ主義を唱え、諸都市が団結してマケドニアに当たることを主張したが、ギリシャ人は狭量と近視眼的見方によってこれを受けず、ほどなくギリシャはマケドニアの軍門に下ったのである。こうした例をもち出して説得しようとするところは歴史学者クーデンホーフの面目躍如たるものがある。

また、クーデンホーフが外からの脅威に対して敏感になっていたもう一つの理由は、国際連盟がアメリカとソ連の不参加で、国際的紛争を調停する能力を持っていないことを見抜いていたからである。特にロシアの脅威については繰り返し言及している。

さらに、彼はヨーロッパ合衆国成立にとって最大の障害はドイツとフランスの過去10世紀にわたる抗争であると言う。ロシアの侵攻を防ぐためには、独仏は和解し、協働するべきである。そのためには、たとえば、ドイツの石炭とフランスの鉄鉱とをパン・ヨーロッパ鉱業への合同に導く関税同盟を成立させ、仲裁および安全保障条約を締結してロシアに対抗する。これらを通じてヨーロッパ経済および財政を共同復興し、やがてパン・ヨーロッパ連邦が建設できるというのである。これらの提案は、クーデンホーフがその後のソ連の東欧支配やフィンランド侵略、さらにシューマン・プランで実現した「欧州石炭鉄鋼共同体」の成立を見通していたことを示すもので、まさに先見の明があったと言える。

次に、「パン・ヨーロッパ」への道筋を提示している。まず第1歩は、各国政府が一つのパン・ヨーロッパ会議を開催すること。第2歩は、ヨーロッパのすべての民主主義国家間で強制的

(compulsory) な仲裁裁判条約ならびに安全保障条約を締結すること。第3歩は、パン・ヨーロッパ関税同盟を創設し、単一経済域へヨーロッパを結合すること。さらにアメリカにならって、民族院と国家院からなる二院制をとるべきことを提案している。また、すべての国語は平等であるべきであると主張する<sup>26)</sup>。クーデンホーフのこれらの提案のうち、EECからEUになることで、ヨーロッパ単一市場はすでに実現し、共通安全保障体制を一応整えられるに至っている。またヨーロッパ議会を二院制にするなど連邦制に向う最近の動きをすでに先取りしていたことがわかる。

### 5. 「パン・ヨーロッパ」運動の盛り上がり

【パン・ヨーロッパ】は多数の人々の間で反響を呼び、ロシア語とイタリア語を除くほとんどの主要国語で発行された。1924年の初めには、ハンブルクの富豪マックス・ワールブルク (Max Warburg) から、著書を読んで感銘を受けたとして、3年間の活動資金用に、6万金マルクの提供があった。この資金は、「パン・ヨーロッパ」運動を大いに支えたのである。この資金を元に、機関誌「パン・ヨーロッパ」を発行することができた。クーデンホーフの精力的な働きかけは着々と成果を上げ、まず、オーストリアのザイベル首相の賛同を得て、ザイベルにオーストリアのパン・ヨーロッパ委員会の会長を引き受けてもらい、さらに、ウィーンの王宮内に運動の本部を置くことを認めてもらっている。その後チェコスロバキアではマサリク大統領とベネシュ外相に会い、ベネシュ外相にチェコスロバキアの名誉会長を、さらにドイツでは国会議長のローベにドイツの会長を引き受けてもらうことに成功した。さらにフランスでは、首相兼外相のエドール・エリオの賛同を得ている。

この後、精力的に全ヨーロッパをかけめぐった結果、1年半で一流の政治家が多数この運動に加入した。さらに、精神的指導者たちの賛同も得たが、代表的な人物としては、ポール・クロデル、ポール・ヴァレリー、ジュール・ロマン、トーマス・マン、ハインリッヒ・マン、ゲルハルト・ハウプトマン、ライナー・マリア・リルケ、シュテファン・ツヴァイク、ジークムント・フロイト、アルベルト・アインシュタイン、オルテガ・イ・ガセット、リヒャルト・シュトラウスなどが挙げられる。

こうして、1926年10月には【パン・ヨーロッパ】の中で訴えたパン・ヨーロッパ会議の開催にこぎつけることに成功したのである。ウィーンに24カ国から2000人以上の参加者が集まる盛大な会議となった。

その後間もなくクーデンホーフにとって、「パン・ヨーロッパ」運動のハイライトとも言うべき出会いがあった。それが、アリストイード・ブリアン (Aristide Briand) との出会いである。ブリアンはフランスで長年外相や首相を務めた有力政治家であるが、早くからヨーロッパ合衆国の理念を持っていた人物である。1924年から29年にかけて独・仏関係の改善に尽力したブリアンは、ドイツの僚友シュトレゼマン (Gustav Stresemann) と協力してロカルノ条約の締結を果たし、その功績が認められ、シュトレゼマンと共にノーベル平和賞を贈られた人物である。クーデンホーフとブリアンは1926年の最初の出会い以来、意気投合し、後にはブリアンに全パン・ヨーロッパ連合の名誉会長を引き受けてもらっている。ブリアンは国家主義者ポアンカレーや彼

の取り巻きとのいさかきがあったが、世界に向かって公然と、パン・ヨーロッパ連合に加入し、その名誉会長を引き受けたことを発表したのである。

ブリアンは、その後本気で「パン・ヨーロッパ」実現のために進み出したが、ついに1929年9月、ジュネーブの国際連盟の総会で「パン・ヨーロッパ」について演説した。彼が訴えたのはヨーロッパ共同体の必要性である。彼の演説には熱狂的拍手が送られた。ブリアンの演説の4日後には、シュトレゼマンが演説を行った。シュトレゼマンは関税同盟の必要性を訴え、さらにヨーロッパ内に共通の切手と共通の通貨を設けるよう提案したのである<sup>26)</sup>。

考えてみると、この時が「パン・ヨーロッパ」運動の絶頂期であったと言える。一哲学者であるクーデンホーフのボランテニア精神から出発した運動が、国際政治の最高の舞台上で議論されるまでになった瞬間であった。

### Ⅲ. 「パン・ヨーロッパ」運動の挫折

#### 1. イギリスの反対

「パン・ヨーロッパ」運動は大きな盛り上がりした後、苦い挫折を味わうが、その一つの原因はイギリスの反対であった。すでに述べたように、クーデンホーフの構想に賛同したブリアンは政治家としてヨーロッパ連合実現に向け活動を開始したが、その具体策を「覚書 (Memorandum)」にまとめた。しかし、その内容が、経済的統合より政治的統合を優先するものであったため、イギリスの反発を招いてしまったのである。もともとクーデンホーフの良き理解者であった植民相のアメリーやアメリーの旧友で個人的にはヨーロッパ連合の賛同者であるチャーチルも、国内世論を意識してか「ブリアン覚書」に対して、「われわれはヨーロッパとともに存在しているのであって、ヨーロッパの中にいるのではない。ヨーロッパと結ばれてはいるが、ヨーロッパの中にも含まれているのではない。われわれはヨーロッパと利害関係があり、結ばれてはいるが、吸収されているのではない<sup>27)</sup>。」と述べて、ブリアンやクーデンホーフを落胆させている。さらに敵はフランスにさえ多く存在し、フィガロ紙が「ブリアン氏は、暖めることによって卵が孵化するように、夢見ること夢が実現するに違いないという望みをもちながら、外務省でヨーロッパ合衆国を年中夢見ている」と論評したことはその典型であろう。一方、クーデンホーフ自身も「覚書」に大きな幻滅を感じていた。それは、ヨーロッパ連合をなんとしてもとりまとめようとする意志が強く出すぎたせい、連合は国際連盟を害するものではないとか、関税同盟を共同体以外の国を差別するためには使わないとか、国家主権は保全されるといったことが散りばめられており、クーデンホーフにとっても、この「覚書」が諸国民の情念に訴える点は何もなかったと感じられたのである。デレック・ヒーターは「覚書」に関して、「非常に多くの異なった用語を使い、各国の権利についてあまりに多くの保証を与えることによって、ブリアンは主権という卵の殻を破ることなく、連邦というオムレツを作ることを提案しているという印象を与えた。この結果、混乱と疑念は避けられなかった<sup>28)</sup>。」と述べている。しかし、敗戦国ドイツは相手にされず、ムッソリーニの存在で疑いの目で見られ始めていたイタリアを頼れない当時の状況下で、国際連盟とロカルノ条約のかけがえのない支持者であったイギリスとフランスを中心に連合構想を組み立て

ざるを得なかったこと、しかもイギリスが伝統的に大陸ヨーロッパの統合に警戒感を持っていた事実を考え合わせると、ブリアンを軽々に非難することはできないのである。

## 2. 国家主義の台頭

独仏間の長年にわたる抗争と憎悪は、ブリアンとシュトレゼマンの尽力でどうにか平衡状態を保っていた。しかし、1929年の秋、シュトレゼマンが51歳で急死し、ブリアンも失脚し、失意のうちに1932年3月この世を去ると、両国では再び国家主義が頭をもたげ始めたのである。なぜなら、フランスは第一次世界大戦で550万人の死傷者を出しており、「虎」の異名をもつクレマンソー外相を筆頭に、ドイツの戦争責任を追求し、重い賠償や領土割譲を要求するのは当然であるとする意見が多数を占めていたからである。一方、ドイツでも、ヴェルサイユ条約第231条による戦争責任を課された屈辱を晴らそうと扇動する者が現れた。ヒトラーがその代表的人物である。

さらに、国家主義者たちを勢いづかせたものに当時の国際経済関係がある。大戦による大量破壊によって物不足となり、1923年にはドイツを中心に大インフレーションが起きた。さらに、1929年のニューヨーク株式大暴落に端を発した世界恐慌がヨーロッパ諸国の経済に大打撃を与えたのである。この結果、各国とも企業倒産や失業者問題が深刻化し、国際協調の象徴である関税同盟どころではなくなり、一斉に保護主義政策に転換してしまったのである<sup>29)</sup>。

こうした状況を背景に、ドイツでは1930年9月ヒトラーが選挙で勝利し、1933年にはついにヒトラー内閣が成立した。ヒトラー政権は「パン・ヨーロッパ」運動を目の敵にして、これを圧殺にかかったのである。1938年3月、オーストリアに親ナチス政権ができると、クーデンホーフは身の危険を察知し、ただちに逃避行を開始した。そしてチェコスロバキア、ハンガリー、ユーゴスラビア、イタリアを通過してスイスに亡命したのである。ナチスはウィーンに侵攻するや、ただちに旧王宮内の「パン・ヨーロッパ」運動の本部を占拠し、約4万冊の著書や文書をすべて破壊したのである<sup>30)</sup>。この時点で、「パン・ヨーロッパ」運動は、実質的に崩壊したと言わざるを得ない。

## 3. アメリカにおける活動

ナチスドイツのポーランド侵攻によって、第二次世界大戦が始まり、中立国スイスにもヒトラーの影響が及ぶようになったため、クーデンホーフは再び亡命を決意した。今度はフランスからスペイン、ポルトガルを経由してアメリカに渡るつもりであった。ところがリスボンのアメリカ総領事館に申請したビザがなかなか下りなかったため、コロンビア大学総長ニコラス・マリー・バトラーに電報を打ち、助けを求めたところ、国務長官コーデル・ハルの署名入りのビザ発行命令が入り、無事アメリカ行きの航空券を手に入れることができたのである。なぜ最初ビザが下りなかったかについて、クーデンホーフは回想録の中で、余りにも多くの人々がアメリカ行きを希望して殺到したから、と述べているが、一方で、ヒトラー打倒のために共に闘っているソ連との友好を重視して、ルーズベルト大統領が「パン・ヨーロッパ」運動を好ましくないと考え発行を拒否したからという見方もある<sup>31)</sup>。

無事にアメリカにたどり着いたクーデンホーフはニューヨーク大学に迎えられ、「戦後ヨーロッパ連合研究ゼミナール」を指導するかたわら、アメリカで「パン・ヨーロッパ」運動支援を要請するための活動を精力的に行った。1942年には、パン・ヨーロッパ公開デモンストレーションを行い、1943年3月には第5回パン・ヨーロッパ会議をニューヨークで開催している。

アメリカにおけるクーデンホーフの大きな失望は、ルーズベルト大統領に面会を拒否されたことである。やはり、ルーズベルトはヨーロッパ連合に反対だったのである。ルーズベルトの戦後構想は、世界にはアメリカとソ連の二大国しか残らず、世界平和はこの両大国の友好関係によって確保されるというものであった。したがって、ヨーロッパ問題も米ソ両国の交渉によって解決されるべきだとし、スターリンの東欧利益圏設立の計画を黙認する態度までとったのである。このルーズベルトの考えが甘かったことは、ヤルタ会談で証明されることになる。

ルーズベルト大統領は1945年4月に亡くなり、トルーマンが後をついだ。トルーマンの政策は基本的にルーズベルトの踏襲であったが、一つだけ違うところがあった。それは、彼がヨーロッパ合衆国構想に賛成だったことである。しかし、現実には国際連合構想が前面に出てきたため、ヨーロッパ合衆国に対する人々の関心は失われてきたのであるが、それでも反対の立場をとるといっわけではなかった。

アメリカでは、ルーズベルトを除き温かく迎えられ、「パン・ヨーロッパ」運動ないしヨーロッパ合衆国の考えも大いに宣伝できたとの気持ちを持って、クーデンホーフは1946年6月アメリカを去り、ヨーロッパに帰ったのである<sup>20)</sup>。

#### Ⅳ. 第二次世界大戦後の「パン・ヨーロッパ」運動

第二次世界大戦後、ヨーロッパに帰ったクーデンホーフは、パリを拠点に、再び「パン・ヨーロッパ」運動を開始した。この時、運動の音頭をとってくれたのはチャーチルであった。1946年9月にチューリッヒ大学でチャーチルが行ったヨーロッパ合衆国の必要性を訴える演説は、欧州統合の歴史に残るものとして評価されているが、演説の内容はそれまでクーデンホーフが説いてきたものと同じであった。

イギリスのみならず、戦勝国を代表する政治家の一人であるチャーチルが、ヨーロッパ連合に賛成したことから、運動はクーデンホーフとの共同指導という形になった。しかし、間もなく両者の間に大きな亀裂が入ることになる。それはチャーチルの女婿であるダンカン・サンディスによるイギリスを含む主権国家連合構想の発表であった。サンディスの背後にチャーチルがいることは間違いなくであり、クーデンホーフは裏切られたのである。国家主権は絶対譲り渡せないというのはイギリスの伝統的政策そのものであり、彼らはその本性を表わしたということである。

こうした事件はあったが、クーデンホーフはひるむことなく1947年9月にスイスのクスタートに各国の同志の議員を募り、「ヨーロッパ議員連盟」を結成し、その第1回会議で、次のとおり決議した。①国連憲章第52条の精神を体して、もっとも速やかにヨーロッパ地域グループを結成すること。②全ヨーロッパを統合する最終目標を持って協力する心構えを有するすべての国家を

包含する諸国民の共同体を「ヨーロッパ合衆国」の名称の下に建設すること。③ヨーロッパの連邦憲法起草のため、できるだけ早くヨーロッパ憲法制定会議を招集すること。そしてこれらの目標を達成するためにそれぞれの政府と国民に訴えようというものであった。

しかし、チャーチルはクーデンホーフが思いもよらない行動に出た。1948年5月チャーチルはオランダのハーグに独自で「ヨーロッパ会議」を招集したのである。しかも、クーデンホーフがアメリカに滞在している間の出来事であった。さらに、サンディスは独自の新しいヨーロッパの旗まで作成していたのである。クーデンホーフが憤慨した落胆したことは想像に難しくない。この件について、チャーチルはクーデンホーフと協議、合意の上であったとする見解もあるが<sup>33)</sup>、誤りであろう。

1948年9月、クーデンホーフはスイスのインターラーケンに13カ国の同志議員100名以上を募って会議を開いた。ここでは、イギリスの主張する主権を持った国家を過渡的な段階としては容認するものの、最終的な目標は連邦国家以外にはないとするので一致したのである。

翌1949年5月、クーデンホーフとチャーチルらの妥協の結果、「ヨーロッパ理事会」の設置が決まった。これによって、クーデンホーフが『パン・ヨーロッパ』を書いて以来26年経ってようやくその基礎らしきものにたどり着いたのであるが、「ヨーロッパ理事会」は権限のない単なる諮問機関になってしまったのである<sup>34)</sup>。

クーデンホーフのヨーロッパ連邦に向けた熱い思いは、中途半端な形でしか実現しなかったが、この時すでに別の動きが始まっていたのである。それが1950年に発表されたシューマン・プランであり「欧州石炭鉄鋼共同体」を目指すものであった。これ以降、ヨーロッパ統合運動はシューマン・プランを中心に展開されることになる。

## V. 「パン・ヨーロッパ」運動の評価

### 1. クーデンホーフ以前のヨーロッパ統合論

ヨーロッパ統合論は、クーデンホーフの「パン・ヨーロッパ」運動で一挙に花が開いたが、この考えはクーデンホーフの独創的発想ではない。彼自身がさまざまな先達から影響を受けたことを認めている。その代表的なものを古い順に並べてみると、まずフランスのフィリップ4世（美王）の顧問であり、ヨーロッパの国家連合型「キリスト教共和国」を建設して、聖地奪回を主張したピエール・デュボアがいる。またほぼ同時期に「君主政論」を書いて普遍的な帝国の建設を訴えたダンテがいた。17世紀には、アンリ4世の腹心、シュリー公爵が、パン・ヨーロッパ評議会の設置や領土の再配置による勢力の均衡を説いた「大計画」を発表している。18世紀には、フランスのサン・ピエール神父が「ヨーロッパ永久平和覚書」を著し、ヨーロッパ統合を訴えている。サン・ピエールの考えはルソーにも受け継がれ、穏やかな国家連合ながらヨーロッパ統合を論じた「サン・ピエール師の永久平和論抜粋」（1756年）に結実した。18世紀の初めには、サン・シモンがヨーロッパ共同体の共通利益を守るためには共通議会が必要とする統合論を展開した。さらに、ヴィクトル・ユゴーも1849年の万国平和会議に出席し、統一ヨーロッパ論を熱心に説いている。また、ルモニエは1872年にその名もずばり「ヨーロッパ合衆国」（Les États Unis

d'Europe) という表題の著書を出している。クーデンホーフはヨーロッパ合衆国の発想をA・H フリートから得たと回想録で語っているが、どうやらルモニエの方が早そうである。これら先輩たちの統合論について、クーデンホーフは「一つのユートピアとしての域を出なかった。」と述べている。そのほかにも、クーデンホーフは武力をもってヨーロッパの統一を勝ち取ろうとした人としてナポレオンを、またイタリア統一の精神的中心となったジウゼッペ・マッッチーニを挙げている<sup>35)</sup>。

クーデンホーフ以前の統合論の中には、現在のEUにも通じる重要な発想がいくつもあり、一概にユートピア的と言って切り捨てるのは誤りであろう。しかし、クーデンホーフが先輩たちと決定的に違うのは、内容はもちろん、実現の過程を具体的に示したことである。さらに重要なことは、彼が実現に向けて、不屈の精神力で行動したことである。

ヨーロッパ統合論については、忘れてはならないもう一つ別の先達たちがいる。これらの人々はハプスブルク帝国に属する国の国民であったが、1848年革命の前後に相次いで連邦国家構想を打ち出している。これらはいずれもハプスブルク帝国内での構想であるが、ヨーロッパ統合を考える上で重要である。まず、チェコ人の歴史家フランチシェク・パラツキーに注目するべきである。彼はオーストロ・スラブ主義に基づき、ハプスブルク帝国を平等の権利を持った8民族地域による連邦国家に移行させることを要求した。また、ルーマニア人アレクサンドル・ギガは、ドナウ川流域諸国（ハンガリー、ルーマニア、ポーランド、チェコ、南スラブ連合）による民主的な「合州国型」連邦構想を打ち出した。また同じルーマニア人のバルチェスクは、反ハプスブルク、反ロシア、反トルコの立場からハンガリー、ルーマニア、南スラブによる「ドナウ合州国」の構想を示したが、これは1867年に締結されたオーストリアとハンガリーの「妥協」(Ausgleich) に似た考えだと言われる。さらに、今日のEU統合を先取りするような構想が現れている。一つはハンガリーの革命指導者コシュート・ラヨシュの「ドナウ連合」(Danubian Union) (1862年) であり、その主な内容は①連合国の共同の権益に関する問題は連合国領土の防衛、外交政策、通商機構とそれに関連する通商法、関税、主要交通網、通貨、度量衡である。②陸・海軍、要塞、軍港などに関する事項はすべて連合が決定する。③連合各国の対外関係については、連合の外交官が一人あるいは共同で行う。④関税は共通とする。⑤連合議会はアメリカ合衆国にならって一院か二院かに決定する。などである。もう一つがハンガリー人クラブカ・テレキの「ドナウ連合」(Danubian Confederation) (1862年) で、内容はコシュートのものとはほぼ同じである。両者の違いは、コシュートが大国に対抗するための統合を重視したのに対して、クラブカは各国の自治を重視した点ぐらいである。こうした一連の構想は、帝国内の大貴族層の強い反発に会い圧殺されていき、一方農民層は1848年の農奴解放令で解放されたばかりであり、民主的な統合構想を支えていくには力不足であったため失敗に終わったのである。その後第一次世界大戦中に、ハンガリーのユダヤ人ヤーシ・オスカールはコシュートの「ドナウ連合」に近い「ドナウ合衆国」構想を発表している。ヤーシは早くからスイスのカントン(州)に注目し、ハンガリーを「東のスイス」にしようとの呼びかけを行っている<sup>36)</sup>。

このように、クーデンホーフのお膝元の旧ハプスブルク帝国内からさまざまな統合論が出ているが、不思議なことにクーデンホーフは彼の著書や論文の中でこれらにまったく触れていない。

かろうじて「小協商」について言及があるくらいである。碩学のクーデンホーフがこれらを見落すとは考えにくい。おそらく、彼の拠り所であるハプスブルク帝国を否定する考えであったことや、自らもれっきとした貴族であることから理屈としては理解しても、感覚的に受け付けなかったのではあるまいか。

## 2. クーデンホーフの発想と行動を支えたもの

クーデンホーフの思想を語る上で重要なのは、彼の育った環境である。彼が学生時代から暮らしたウィーンはオーストリア＝ハンガリー帝国の首都で、世界中で最も国際色豊かな都市であった。そこでは、コスモポリタンであることは高貴であり、国粋主義者であることは小市民的であると考えられていた。こうした雰囲気は640年間続いたハプスブルク王朝の特徴でもある。ハプスブルク王朝は始祖ルドルフが1273年神聖ローマ皇帝に選ばれてから、1918年第一次世界大戦で敗北するまで続いた。有名な「他の国は戦いをするがよい。幸多きオーストリアよ、お前は結婚するがよい。」(*Bella gerant alii, tu felix Austria nube.*)で知られるように武力とたくみな結婚政策で勢力を拡大し、15世紀後半にマクシミリアン1世がブルグンド(ブルゴーニュ)を統治し、16世紀にカール5世がスペイン王になる頃には西はポルトガルから東はトランシルバニアまで、北はネーデルランドから南はシチリアまで、さまざまな国や民族を抱えた緩いヨーロッパ共同体ないし国家連合を形成したのである。統治者自身が敬虔(ピエタス・アウストリアカ) (*Pietas Austriaca*)と慈悲(クレメンティア・アウストリアカ) (*Clementia Austriaca*)の心を持って、さらに異常なまでの語学の才能を活かして、その土地の文化を吸収し、定着していったからこそ、ヨーロッパ史に類例を見ない普遍的、超国家的な王朝ができたのである。後年クーデンホーフが「私はハプスブルク帝国という多民族国家の中で育ち、偏狭なナショナリズムを排斥する空気の中で成長したから、汎ヨーロッパ運動という構想は自然に出てきた」と述べているのは合点がいく<sup>37)</sup>。

## 3. 貴族主義

クーデンホーフの思想の根底にあるもう一つのもは、貴族主義であろう。彼はその哲学および歴史研究からヨーロッパ文化の特徴をギリシャ精神にキリスト教とゲルマン精神が融合したものと見る。特に、ゲルマン民族が持つ勇敢と名誉を尊ぶ心、つまり英雄主義を評価する。また「品位」と「形」を重視する。ここにはニーチェの強い影響が見られるが、クーデンホーフはヨーロッパ精神すなわち英雄主義を伝えてきたのが貴族であり、それは騎士道の形で残り、現在この精神を受け継ぐのがジェントルマンであるとする。さらに、クーデンホーフは近代民主主義の最大の問題は、貴族が存在しないこととまで言い切っている<sup>38)</sup>。自らも貴族であるクーデンホーフがこうした貴族主義的雰囲気をただよわせていたとすれば、彼の「パン・ヨーロッパ」運動に対して「ジャーナリズムの関心を引いただけで実質的な成果は何もなかった<sup>39)</sup>」というような厳しい批評や、「政治家やヨーロッパ経済の指導的人物など影響力のある人々を取り込むことには非常に巧みに成功したが、大衆を動員することはできなかった<sup>40)</sup>」という評価がされたこともうなずける。

#### 4. 連邦主義と機能主義

ヨーロッパ統合理論には、大きく分けて、連邦主義 (Federalism) と機能主義 (Functionalism) および機能主義から派生した新機能主義 (Neo functionalism) がある。連邦主義は、複数の国家を一つの連邦国家に統合しようとする動きおよび考え方で、クーデンホークの「パン・ヨーロッパ」はこれに属する。一方、機能主義は1943年にD. ミトラニーが主張した考え方で、国家間の対立を回避するためには、まず国家主権が直接的に影響するのが少ない、たとえば経済分野で国家間の協力関係を構築し、それを隣接する分野に拡大することによって、やがて国家間の国境の重要性を低下させるというものである。また新機能主義は1950年代にE. ハースが主張した考え方で、基本は機能主義と同じであるが、違いは統合の進展を監視する「統合機関」の役割を重視する点と、特定分野における統合は、次々にほかの分野へと「スピルオーバー効果」によって広がり、最終的に、国家主権に抵触する安保や外交など「高次元の政治」分野まで発展するという点である。

クーデンホーフが唱える「パン・ヨーロッパ」が経済的統合より、政治的統合を優先したのは事実である。難しいと半ばわかっているながらイギリスを加えることにこだわったのは、イギリスびいきの父ハインリッヒの影響も手伝ってか彼自身もジェントルマンを理想のヨーロッパ人の形と考えたからであろう。連邦主義に対しては、統合理論として未成熟で、ヨーロッパ統合に与えた影響力は機能主義や新機能主義より見劣りするとの評価がある<sup>41)</sup>。しかし、機能主義は「パン・ヨーロッパ」運動の挫折を基に構築されたものであり、新機能主義に至っては、石炭鉄鋼共同体設立からEUまでの動きを跡づけたにすぎない。ヨーロッパがEUを達成し、さらに政治的統合に向おうとしている今日、より重要なのは連邦主義の方であろう。

#### おわりに

クーデンホーフは、近代民主主義の最大の問題は貴族が存在しないことだと言っているが、第一次世界大戦後の危機的状況のヨーロッパを立ち直らせるためには、偉大さ、強さと自由、調和の精神を持った新しい貴族の出現が必要であると考えたのである。彼は自ら実践的理想主義者を標榜したが、いっこうに動かない周囲の人々を見て、自ら新貴族になって人々の先頭に立とうとしたのではあるまいか。彼は、ペリクレスの「自由は幸福の源泉である。そして自由の源泉は勇気である。」の言葉を引用しながら、自由を得るためには勇気と実行力が必要だと説く。それと同じ考え方を平和の実現にも援用して、「いわゆる平和主義者こそもっとも平和に害がある。平和の実現には戦闘的、実践的でなければならない<sup>42)</sup>。」と主張する。彼はまさに言行一致の人であった。時にはナチスに命を狙われる危険をおかしながらの実践であった。

それにしても驚かされるのが、クーデンホーフの意志の強さと楽観的な性格である。このような彼の性格が何に由来するのかが興味のあるところであるが、日本大学から、扉にはめる銅板の銘を頼まれ、すぐに「友よ認識の示す悲観思想を、意志の示す楽観思想によって征服したまえ」(Überwindet, meine Freunde, den Pessimismus der Erkenntnis durch den Optimismus des Willens) の一節を選んだように、父から受け継いだショーペンハウエルの哲学が彼を支え、突

き動かしていたのではないかと考えられる<sup>43)</sup>。

1950年アーヘン市はカール大帝にちなんでヨーロッパ統合に功績のあった人物を表彰するシャルルマーニュ国際賞を制定して、その第1回目の受賞者にクーデンホーフを選んだことは、彼がいかに高く評価されていたかの証左である。しかし、ノーベル平和賞は、何回も候補に上りながら結局受賞できずじまいであった。このあたりがクーデンホーフが政治家でなかったこともあり、当時の彼に対する評価の限界であったと考えられる。

しかし、ヨーロッパが新しい段階へと歩を進めようとしている現在、クーデンホーフはもっと評価されてしかるべきであろう。2000年5月のフィッシャー構想の発表に続いて、2002年10月諮問会議を設けてヨーロッパ連邦の実現に向けて動き出したEUにとって、クーデンホーフの発想と行動は重要な指針となるであろう。

## 注

本稿の全般にわたってクーデンホーフ・カレルギー全集 全9巻（鹿島出版会 1970年～1971年）（以下「全集」）を参照したが、クーデンホーフの主著である『パン・ヨーロッパ』については、英語版Pan-Europe, Alfred・A・Knopf, New York, 1926を参照した。

- 1) 「全集」第7巻所収 “回想録” pp.14-20
- 2) シュミット村木眞寿美（1998）：クーデンホーフ光子の手記、河出書房新社pp.22-23
- 3) 木村毅（1971）：クーデンホーフ光子伝、鹿島出版会 pp.14-36
- 4) 「全集」第7巻所収前掲 p.27-31
- 5) 木村毅：前掲書pp.164-165
- 6) 「全集」第7巻所収前掲 p.32, pp.58-62, pp.67-73
- 7) 木村毅：前掲書 pp.246-247, p.252, pp.335-336
- 8) 木村毅：前掲書 pp.259-260
- 9) 「全集」第7巻 所収前掲 pp.80-81
- 10) Richard N. Coudenhove=Kalergi（1926）；Pan-Europe, Alfred.A.Knopf, New York pp.4-8
- 11) 木村毅：前掲書 pp.266-267
- 12) Oswald Spengler; Der Untergang des Abendlandes, ungekürzte Ausgabe 1972, (1. Auflage 1922) Deutscher Taschenbuch Verlag, München p.140, p.144, p.148, p.216
- 13) スチュアート・ヒューズ（川上源太郎訳）（1968）：二十世紀の運命、潮出版 pp.131-132
- 14) 上山安敏（2001）：神話と科学、岩波書店 pp.65-86
- 15) R. Coudenhove=Kalergi: loc. cit.
- 16) 「全集」第2巻所収 p.305
- 17) 「全集」第4巻所収 p.217-218
- 18) 「全集」第5巻所収 p.289
- 19) 「全集」第6巻所収 p.341
- 20) R. Coudenhove=Kalergi: op. cit. p.xii (Foreword)
- 21) 塚本哲也（1992）：エリザベート、文芸春秋 p.172
- 22) 木村毅：前掲書 p.301
- 23) 「全集」第7巻所収 前掲 p.26, pp.112-126

- 24) 「全集」第1巻所収 “パン・ヨーロッパ” p.40
- 25) R.Coudenhove-Kalergi: op. cit. pp.3-8, pp.51-54, pp.87-90, pp.132-140, pp.172-176
- 26) 「全集」第7巻所収 前掲 pp.127-132, pp.138, p.142, pp.152-160
- 27) 「全集」第7巻所収 前掲 pp.190-193
- 28) Derek Heater (1992): *The idea of European unity*, Leicester University Press, Leicester & London, pp.121-146
- 29) Derek Heater: op. cit. pp.119-120, p.122, p.144
- 30) 「全集」第7巻所収 前掲 pp.195-196, pp.211-214, pp.239-244
- 31) 塚本哲也 (1999) : わが青春のハプスブルク、文芸春秋、pp.323-324
- 32) 「全集」第7巻所収 前掲 pp.265-268, pp.278-279, pp.288-290, p.300-302  
「全集」第2巻所収 “ヨーロッパ国民” p.60
- 33) 塚本哲也 (1999) : 前掲書 p.333
- 34) 「全集」第7巻所収 前掲 pp.309-310, p.328-330, p.332, pp.339-341  
「全集」第9巻所収 “世界的勢力としてのヨーロッパ” p.72
- 35) 「全集」第1巻所収 “1961年のヨーロッパ” pp.224-225  
「全集」第2巻所収 “ヨーロッパ国民” pp.64-82  
「全集」第6巻所収 “戦争から平和へ” pp.299-301  
Derek Heater: op. cit. pp.8-12, pp.15-38, pp.61-90, pp.97-108.  
木村毅: 前掲書 pp.298-299
- 36) 羽場久混子 (1994) : 統合ヨーロッパの民族問題、講談社 pp.71-99
- 37) Adam Wandruszka (1978): *Das Haus Habsburg*, Herder & Co. Wien pp.17-18, p.26, p.86, p.93, p.142.  
「全集」第7巻所収 前掲 pp.62-63  
江村洋 (1990) : ハプスブルク家、講談社 p.5  
加藤雅彦 (1990) : 中欧の復活、日本放送出版協会, p.171  
塚本哲也 (1999) : 前掲書 p.327
- 38) 「全集」第5巻所収 “ヨーロッパの3つの魂” pp.94-95, p.99  
“悲惨なきヨーロッパ” p.259  
“ゼントルマン” pp.321-324  
「全集」第6巻所収 “自由と人生” pp.110-112  
「全集」第8巻所収 “第1回鹿島平和賞受賞記録—日本大学における座談会” p.115  
“美の国” pp.332-336  
「全集」第4巻所収 “物質主義からの離脱” p.98, p.104, pp.223-224, p.229.
- 39) Stephen A. Schuker: "The European Union" p.19 in *The European Union* ed. by Dean J. Kotlowski (2000), Ohio University Press, Athens (Ohio)
- 40) Derek Heater: op. cit. p. 127
- 41) 久保広正 (2003) : 欧州統合論、勁草書房 pp.39-47
- 42) 「全集」第8巻所収 “カレルギー伯の人と思想—塚本哲也” p.154  
「全集」第9巻所収 “世界平和への正しい道” p.204  
「全集」第3巻所収 “実践的理想主義” pp.7-8, p.305
- 43) 木村毅: 前掲書 p.442

---

### Summary

Just after World War I, a man born in Tokyo began the "Pan-Europe" movement which led to the present European Union. His name was Count Richard Coudenhove-Kalergi. His father was an Austro-Hungarian Empire diplomat and his mother was a Tokyo merchant's daughter.

While the Europe crisis noted in Oswald Spengler's "Decline of Europe" was prevailing in the whole of Europe, Coudenhove-Kalergi advocated the unification of Europe and tried to realize it with his strong will.

This paper attempts to analyze the reasons for the rise and fall of the "Pan-Europe" movement which Count Coudenhove-Kalergi started.

Through this analysis, we find behind his conception and action the culture and spirit of Habsburg Empire, the influence of his father Heinrich and his wide and deep thinking in history and philosophy.

Since German foreign minister Fischer presented his idea of European Confederation in 2000, Europe has been progressing toward a higher level of unification.

Now, Coudenhove-Kalergi's conception and action should be more highly evaluated.